



F. S. Eringa. *Soendaas-Nederlands Woordenboek*. Dordrecht: Foris Publications Holland, for Koninklijk Instituut voor Taal-, Land-en Volkenkunde, Leiden, 1984. 846 p.

インドネシアの一言語であるスダ語は、ジャワ語に次ぐ大きな常用人口を有する言語であるにもかかわらず、これまであまり学問的に注目されることがなく、また学習書の不足から勉強することも難しい言語であった。本稿で扱う、フォコ・シーボルト・エーリンハ (Fokko Siebold Eringa, 1918~83)¹⁾ の辞書は、インドネシア独立後に出版された唯一の外国語によるスダ語辞書で、スダ語学習者及び研究者向きに出版されたものである。スダ語辞書は19世紀の半ば以降、語彙集やポケット版の辞書も含め何冊か出版されているが、ここでは代表的な9冊²⁾との比較において論じることとする。

- 1) 著者については、本辞書の序文及び、彼の蔵書の競売用に作製されたカタログ (Antiquariaat G. J. Bestebreurtje, Lichte Graad 2, P. O. Box 364, 3500 AJ, Utrecht, Netherlands) のはしがきを参照した。
- 2) ちなみに、この9冊のスダ語辞書を出版年順に並べると以下のようなものである。
 1. Wilde, A. De. *Nederduitsch-Maleisch en Soendasch Woordenboek*. Edited by T. Roorda. Amsterdam. 1841. 240 p.
 2. Rigg, J. A *Dictionary of the Sunda Language*. Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap voor Kunsten en Wetenschappen. 29. Batavia: Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen. 1862. 537 p.
 3. Geerdink, A. *Soendaneesch-Hollandsch Woordenboek*. Batavia: H. M. Van Drop & Co. 1875. 444 p.
 4. Oosting, H. J. *Soendasch-Nederduitsch Woordenboek*. Batavia: OGILVIE & Co. 1879. 874 p.; Supplement. Amsterdam: Johannes Müller. 1882.
 5. Coolsma, S. *Soendaneesch-Hollandsch Woordenboek*. Tweede Druk. Leiden: A. W.

本辞書は、見出し語がおよそ3万語で、既存の辞書のうち最大の規模である。そのことは、序文に書かれているようにケルン (R. A. Kern) の未完成の辞書を基礎とし、コールスマ (Coolsma) の辞書とサチャディブラタ (Satjadibrata) の辞書の見出し語を完全に吸収した上で、自らが雑誌や小説で見つけた語彙とインドネシア滞在中 (1954年) に収集した語彙を加えていることによると考えられる。これらエーリンハ自身によって新しく加えられた語彙を分類すると以下ようになる。

- (1) 擬音語・擬態語 (例) *dalégdog*
- (2) 標準スダ語の母音が変化した語 (例) *dahas*
- (3) 標準スダ語の子音が変化した語 (例) *uruh*
- (4) 標準スダ語の省略形 (例) *dak*
- (5) インドネシア語がスダ語化した語 (例) *dahi*
- (6) 外来語及び新語 (例) *daléktur*
- (7) 口語 (例) *dalal*
- (8) 幼児語 (例) *emam*

上記のうち、特に(2)と(3)に属する語彙が数多く見出し語として採り入れられている。これらの語彙は、バンドゥン地方を中心に使われている標準

Sijthoff's Uitgevers-Maatschappij. 1913. 729p.; 1st ed. 1884. 424 p.; 第2版のリプリント 1930.

6. Lezer, L. A. *Lezer's Soendasch Woordenboek, Soendasch-Nederlandsch, Nederlandsch-Soendasch*. Bandung: Boekenverzendhuis L. A. Lezer. 1931. 350 p.
7. Satjadibrata, R. *Kamoes Soenda-Indonesia*. Tjetakan ke-II. Djakarta: Balai Poestaka. 1950. 414 p.; 1st ed. *Kamoes Soenda-Melajoe*. Djakarta: Gunseikanbu Kokumin Tosyokyoku (Balai Poestaka). 1944. 379 p.
8. Satjadibrata, R. *Kamus Basa Sunda*. Tjetakan ka 2. Djakarta: Perpustakaan Perguruan Kementerian P. P. dan K. 1954. 479 p.; 1st ed. *Kamoes Basa Soenda*. Djakarta: Balai Poestaka. 1948. 448 p.
9. Panitia Kamus Lembaga Basa & Sastra Sunda (LBSS). *Kamus Umum Basa Sunda*. Cetakan ke-5. Bandung: Tarate. 1985. 568 p.; 1st ed. 1980.

スンダ語の変種と考えてよい。解説には、標準スンダ語が示されているので、どの語彙が変化したものかが明らかで、農村部などで遭遇する聞き慣れない語を確認するのに便利である。

既存のオランダ語辞書と同様に、本辞書も派生語（特に接辞のついた形の語）を詳しく載せている。サチャディブラタの辞書やスンダ言語文学協会（Lembaga Basa & Sastra Sunda, 以下 LBSS）の辞書とは比較にならないほど、派生語、熟語等の数が多く、またその解説も詳しい。これは本辞書の最も優れている点である。しかし、残念なことに、例文や用例が皆無であり、文章の中でその語がどのように使われるのかが明らかでなく、この点ではサチャディブラタと LBSS の辞書の方が詳しく例文を載せていて優れている。これは本辞書だけでなく、既存のオランダ語辞書は総てそうであり、本辞書もその批判を免れない。なお、慣用句、言いまわし、諺については特に詳しくはないが、一般的、常識的なものは紹介している。

類義語や対語についてであるが、これも十分に示されておらず、サチャディブラタと LBSS の辞書の方がより詳しい。当然であるが、オランダ語で解説がなされるために、語義は正確に説明され得るが、別のスンダ語での説明がないために、学習者は他のスンダ語と関連づけて理解することができない。このことは、ある言語を別の言語で解説することについてまわる限界でもあり、サチャディブラタと LBSS の辞書以外のどの辞書も、語の持つ微妙なニュアンスまでは説明できず、スンダ語—スンダ語辞書に勝ることはできない。

さて次に、スンダ語に特徴的である敬語体系（*undak usuk basa*）³⁾と動詞導入詞（*kecap pangantar pagawéan*）を本辞書がどのように扱っているかを見る。

敬語体系はスンダ語だけでなく、ジャワ語等の他の地方語にもみられるもので、基本的にはスピーチ・レベルによって分類される語彙を入れ替えることによって成り立っている。その故に、語彙をいかに分類するかが重要であり、今日までコール

スマの5分類（非常に粗野な語 *kasar pisan*, 粗野な語〈日常語〉*kasar*, 中間語 *sedeng*, 敬語 *lemes*, 最高敬語 *lemes pisan*）が定説化している。これに対し、エーリンハはさらに細かく8分類している。すなわち、コールスマの言う中間語（*sedeng*）⁴⁾を3分類して、謙讓語（S: *sedeng*）、中間語（P: *panengah*）、一般語（S*: *sedeng**）とし、また敬語（*lemes*）を謙讓語として別の語彙を持つもの（I*: *lemes**）と、別の語彙は持たず同じ語彙を謙讓語と尊敬語に使うもの（I: *lemes*）に二分している。

エーリンハの敬語の二分化及び謙讓語の設定は、既存の辞書にはなく、この辞書の優れている点の1つである。このことを例で示すと以下のようである。

謙讓語彙 尊敬語彙

kirim (送る)	kintun (I)	kintun (I)
indit (出発する)	mios (s)	angkat (I*)

また、コールスマが *sedeng*（エーリンハの *panengah* と同一）として分類した語彙は極く少ないのであるが、エーリンハはこれをさらに二分しその一方を一般語（*sedeng**）としているのは意味のないことのように思われる。

評者自身は、コールスマの *sedeng*（＝エーリンハの *panengah* 及びエーリンハの *sedeng**）は、辞書で特に分類する必要はなく、例外として解説をつける程度で良いと考える。本辞書では、スピーチ・レベルを変えるために入替えを行う際の元となる日常語彙（*kasar*）に詳細な語義の解説を行い、個々の尊敬語彙等には、該当する日常語彙を参照せよとのみ指示を与えている。特に尊敬語彙等に熟語や慣用句のある場合には解説を付けているものの、各々について例文が示されていないため、主語が替わった時にどの語彙を使うのが適切なかがわからない。

次に動詞導入詞（*kecap pangantar pagawéan*）で

3) この点については、森山幹弘『スンダ語の敬語』（大阪外国語大学インドネシア語学科卒業論文、1985年）を参照されたい。

4) コールスマが *sedeng*（中間語）として分類しているものは、エーリンハの *panengah*（中間語）に相当するので、その用語に注意する必要がある。詳しくは、Coolisma, S., *Soendaneesche Spraakkunst*. Leiden: A. W. Sijthoff, 1904. pp. 32-34 を参照のこと。

あるが、これはある動作を導く語で、普通はこの語の後に本動詞が置かれ、動作に微妙なニュアンスの違いを与えるものである。本辞書では、この語は「動詞的間投詞」(Werkwoordelijk Tussenwerpsel)として分類され、また「前置的」と解説されている。

(例) Kakara ogé gék geus sor disuguhkeun. 「腰を下ろすやいなや、もう、もてなされた。」

上の文で、動詞導入詞 gék は本動詞の diuk (座る) が省略されているが、「さっと座る」という意味を含んで使われている。もう1つの動詞導入詞 sor は「何か差し出される」意味を表す本動詞(ここでは disuguhkeun) を導き、「すぐさま…」の感じを与えている。

このように本動詞の省略がしばしば行われるため、既存の辞書が本動詞を示しているように、それぞれの動詞導入詞がどの動詞とペアで使われるのかを明示しておくべきであると考えるが、本辞書には本動詞が示されておらず、不親切である。

本辞書は、語の用法についてわかりにくいという欠点を持ってはいるが、ケルンの集めた語彙と、LBSS の辞書を除く8冊の辞書の一語一語について検討を行なった上で語義を丁寧に解説しており、現代スンダ語辞書としては最良のものと言えよう。

(森山幹弘・Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, Leiden.)

J. D. Legge. *Intellectuals and Nationalism in Indonesia: A Study of the Following recruited by Sutan Sjahrir in Occupation Jakarta*. Monograph Series. Ithaca, New York: Cornell Modern Indonesia Project, 1988. ix+159 p.

I

スタン・シャフリル (1911~66) と彼が率いたインドネシア社会党 (PSI: Partai Sosialis Indonesia) は、インドネシア政治史にユニークな位置をしめている。第1は、政党の基盤と党勢からみれば、その成立 (1948年) から解党 (1960年) に至るまで、弱小政党の一つであったのにもかかわらず、多数の閣僚を出すなど「身の丈に余る」役割

を果たしたことである。第2は、PSI に参加したのがもっぱら高学歴の知識人であったので、この政党は政治集団である以上に、ある思想的モードを有するグループとして、国の内外に影響力をもったことである。党としての活動を停止してすでに28年も経つのににもかかわらず、シャフリルなし PSI (系) という言葉は、今なお話題にされることが多い。

著者レッグは、このユニークな知識人の集団について、どういう評価を下すことが適当なのかという点を本書の課題としている。その背後には、現代史研究者の間でシャフリルと PSI についての評価が大きく分かれているという事情がある。とくに顕著なのは、ケーヒンとアンダーソンの評価の違いで、前者が独立直後のシャフリルの役割を重視するとともにその政治思想を高く評価した¹⁾ のに対し、後者はそれをほとんど意味のないものとし代わりに政敵タン・マラカと彼にしたがう「青年グループ」(ブムダ) を重視した。²⁾ これに対して著者は、アンダーソンによって振られすぎた振り子を戻す、すなわちシャフリルらの意義を再評価する (9 ページ) 必要から本書を編んだと述べている。なお、著者はオーストラリア・モナシュ大学歴史学教授でインドネシア史専攻、著書にスカルノに関する平明な伝記³⁾ や、インドネシア地域研究の入門書⁴⁾ がある。

II

本書の目次は次の通りである。第1章序論、第2章インドネシアにおけるナショナリズムと知識人の役割、第3章占領下のジャカルタにおけるシャ

- 1) Kahin, George McT. *Nationalism and Revolution in Indonesia*. Ithaca: Cornell University Press, 1952.
- 2) Anderson, B. R. O'G. *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance, 1944-6*. Ithaca: Cornell University Press, 1972.
- 3) Legge, J. D. *Sukarno: A Political Biography*. Sydney: Allen & Unwin, 1985.
- 4) Legge, J. D. *Indonesia*. Sydney: Prentice-Hall of Australia, 1977.